

理想自己の記述傾向および現実自己との 不一致からみた自己愛類型の特徴

小平英志*・小塩真司**

問 題

2種類の自己愛 近年、自己愛人格障害には2種の様相があることが指摘されている。Gabbard (1989, 1994) は、これまでの自己愛についての報告をまとめ、他者からの評価に無関心で自己中心的な「無関心型」と、他者の評価に敏感で内気な「過敏型」に分類できるとした。また、Broucek (1982) は、誇大的で傍若無人な自己中心型と引きこもりがちで自己意識の強い解離型に分類している。さらに Rosenfeld (1987) は、能動的に外界をコントロールしようという患者群と、外界を避けて引きこもうとする患者群の存在を指摘している。これらはいずれも、自己愛人格障害には、積極的に外界に働きかけようとするあまり自己中心的にふるまうケースと、他者の評価を気にするあまり引きこもりがちになるケースが含まれていることを示唆したものである。

これに対して、小塩 (2002) は大学生を対象とした調査で、自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) の下位尺度に対して主成分分析を実施し、類型化を行っている (自己愛の2成分モデル; 小塩, 2004)。小塩 (2002) は主成分分析の結果、自己愛の全体的な高さを表す「自己愛総合」の軸と、「注目賞賛欲求」と「自己主張性」のどちらが優位であるのかを表す「注目－主張」の軸を得ている。特に、自己愛総合の得点が高い個人について、Gabbard の指摘する2種類の自己愛に相当する類型が得られたことを報告している。このことは、一般の人々の中に、臨床場面における自己愛類型に相当する者が存在することを示していると言えるだろう。

自己愛と理想自己 ところで従来から、自己愛と関わりが深い概念の1つとして、理想自己が注目されてきている (Freud, 1914; カーンバーグ, 2003 等)。例えば、Emmons (1984) では、自己愛傾向と、理想自己と現実自己のずれの程度 (現実－理想不一致) との関連が検討されているが、自己愛傾向と現実－理想不一致の間には基本的に負の関連があることが示されている。また、現実自己と理想自己の一致の程度を指標として用いた Raskin & Terry (1988) においても、自己愛傾向と一致度との間に正の相関関係があることが示されている。これらはいずれも自己愛傾向が高いほど理想自己と現実自己とのずれが小さいことを報告し

* 人文学部非常勤講師・名古屋大学大学院－性格心理学・社会心理学

** 人文学部助教授－性格心理学・青年心理学

ている。

近年指摘されるようになった2つの自己愛型の特徴は、今後、様々な観点から検討されていく必要があると考えられる。その中でも、理想自己との関係を検討することは重要な観点の1つであると言える。これまでの研究では、主に理想自己からのずれを検討する点に注目したものが多く、自分に関してどのような内容の理想を思い描いているのかという、理想自己の内容に焦点を当てた研究はあまり見られない。自己愛傾向の2成分モデルによって分類される自己愛類型の特徴を整理するため、現実－理想不一致や理想自己の内容などとの関連をみていく必要があると考えられる。

その中で小塩・小平（2005）は、自己愛の2成分モデルの観点から現実－理想不一致、理想自己の内容との関連を検討している。現実－理想不一致の測定に個性記述的な視点による測定法を用い、不一致の測定と同時に個人の意識しやすい理想自己の側面の抽出を試みている。自己愛類型と現実－理想不一致との関連を検討した結果、自己愛が高く主張優位（「無関心型」）である群では、現実－理想不一致が小さいことが明らかとなっている。また、自己愛の類型と理想自己の記述との間に関連があることも示された。

しかしこれらの結果は、現実－理想不一致の程度と理想自己の記述傾向とを別々に分析したものであり、各類型に位置する者がどのような理想を意識し、それに対してどの程度の不一致を感じているのかを統合的に捉えたものではない。そこで本研究では、小塩・小平（2005）のデータに対して、理想自己の記述内容と現実－理想不一致の程度から自己愛の類型を予測するという観点で再分析を行う。この検討を通して、自己愛傾向の2成分モデルによって分類される4群の特徴を、理想自己の観点から整理することが本研究の目的である。

方 法

分析対象 小塩・小平（2005）で実施された調査に参加した、愛知県内の大学生のうち、回答に不備のなかった447名を分析対象とした。内訳は、男性225名、女性222名であり、平均年齢は19.77歳であった。

調査内容 ①自己愛人格目録短縮版（NPI-S）：小塩（1998, 1999）が作成したNPI-Sを使用した。「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」の3下位尺度、各10項目からなる。②自己不一致測定票：小平（2002）の個性記述的視点による方法を用い、理想自己の内容と現実自己とのずれを測定した。まず、理想の（こうありたい）自分の状態を表す記述を5つ挙げるよう求めた。次に、挙げられた語それぞれについて、どの程度「実際の自分」に当てはまるかを「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法で評定するよう求めた。

結 果

1. 自己愛の類型化及び自己不一致の得点化

自己愛の類型化 小塩（2002）と同様の手続きで自己愛の類型を行った。まず、NPI-S の 3 つの下位尺度得点を対象に主成分分析を行い、累積寄与率が 80% を超える 2 成分を採用した¹⁾。先行研究と同様に、第 1 主成分には NPI-S の全ての下位尺度が正の重みを示し、自己愛傾向の総合的指標であると判断された。第 2 主成分は「注目・賞賛欲求」が正の重み、「自己主張性」が負の重みを示していた。この成分は、他者からの注目や賞賛を受けたいという「注目・賞賛欲求」が優位であるか、自分の意見や考えを他者に主張したいという「自己主張性」が優位であるかを表すものであると解釈された。

得られた第 1・第 2 主成分得点をもとに、調査対象者を 4 群に分類した：自己愛低・主張優位（107 名）、自己愛低・注目優位（106 名）、自己愛高・主張優位（117 名）、自己愛高・注目優位（117 名）。

自己不一致得点と理想自己の記述傾向 まず、自己不一致測定票への反応から、評定値を合計して逆転させ、現実－理想不一致得点を算出した（平均 3.07、標準偏差 0.84）。この得点は値が大きいほど、理想自己と実際の自分（現実自己）との間に不一致を感じていることを示す。

理想自己の記述傾向のコーディングを行うため、447 名が記述した 2,220 の記述を対象に、まず、完全に一致する記述をまとめた。その結果、1,200 種類の記述が確認された。さらに、表現が違うものの同一の内容を示す記述が見られたため、それらを意味の変わらない範囲で統一した。その結果、421 種類にまとめられた。この 421 種類のうち、頻度 10 以上のものは 47 記述であった（Table 1）。

Table 1 理想自己の記述（頻度 10 以上）

人から好かれる、優しい、信用・信頼される、尊敬される、思いやりのある、意志・信念のある、自分に満足した、強い、主張のできる、頭のいい、素直な、人の気持ちがわかる、前向きな、明るい、積極的な、楽しい、格好のよい、面白い、健康な、努力する、正直な、夢のある、責任感のある、気配りできる、社交的な、実行力のある、個性のある、話し上手な、お金のある、寛大な、協調性のある、意見・考えを持った、目標を持った、冷静な、友達・仲間の多い、笑顔な、有能な、自分を持った、元気な、役に立つ、仲良くできる、行動力のある、真面目な、幸せな、親切的な、決断力のある、しっかりした

¹⁾ 主成分分析結果に関しては、小塩・小平（2004）で詳説。

2. 判別分析による検討

全体で頻度 10 以上であった 47 種類の属性語の記述の有無をダミー変数とし、現実－理想不一致得点とともに説明変数とした。また、基準変数を自己愛の類型とした。ステップワイズ法による正準判別分析を実施して変数の選択を行った結果、現実－理想不一致と 11 の属性語の記述傾向が有意もしくは有意傾向 ($p < .10$) を示した。

この 12 変数を用いて、再び判別分析を実施した。その結果、第 1 及び第 2 判別関数が有意であった (いずれも $p < .001$)。正準相関は第 1 判別関数で .37, 第 2 判別関数で .35 であった。2 軸による累積説明率は 92.94% であった。分析結果を Table 2 に示す。

第 1 軸は、正方向で『仲良くできる』、『人から好かれる』、『面白い』、『幸せな』といった属性が記述される傾向が強く、負の方向で『有能な』が記述される傾向にあった。また、現実－理想不一致は正の判別係数を示していた。第 2 軸では、正方向で『努力する』、『人から好かれる』、『仲良くできる』、『格好のよい』、『自分に満足した』といった記述がなされる傾向にあり、負の方向では『積極的な』、『意見・考えを持った』が記述されやすいようであった。現実－理想不一致の判別係数は負の値を示していた。以下、自己愛の類型ごとにその特徴を検討する。

自己愛低・主張優位 自己愛低・主張優位は、第 2 軸と負の係数を示していた。第 2 軸には、現実－理想不一致、『積極的な』、『意見・考えを持った』の記述傾向が負の係数を示している。

Table 2 正準判別分析の結果

		標準化判別係数	
		I	II
説明変数	現実－理想不一致	0.73	－ 0.37
	理想自己の記述		
	『仲良くできる』	0.40	0.38
	『人から好かれる』	0.33	0.39
	『明るい』	－ 0.05	－ 0.26
	『努力する』	－ 0.10	0.46
	『有能な』	－ 0.36	0.15
	『幸せな』	0.31	0.16
	『面白い』	0.33	0.12
	『自分に満足した』	0.21	0.32
	『積極的な』	0.03	－ 0.35
	『格好のよい』	－ 0.03	0.34
	『意見・考えを持った』	0.09	－ 0.31
基準変数	自己愛の類型		
	自己愛低・主張優位	－ 0.02	－ 0.53
	自己愛低・注目優位	0.48	－ 0.11
	自己愛高・主張優位	－ 0.62	0.10
	自己愛高・注目優位	0.20	0.49

つまり、この類型に位置する者の特徴として、積極性や意見・考えを持つことを理想として意識しやすく、かつ、その理想に現実の自分が到達できていないと感じる傾向が挙げられる。

自己愛低・注目優位 この類型は第1軸との係数が正であった。第1軸には、『仲良くできる』、『人から好かれる』、『面白い』、『幸せな』が正の係数を示しており、また、現実－理想不一致の係数は正であった。この類型に位置する者は、他人との関係が良く幸福な状態であることを理想とし、かつ実際はそれらを満たせていないと感じている傾向にあるようであった。

自己愛高・主張優位 この類型は第1軸と負の係数を示していた。第1軸に負の係数を示していたのは、『有能な』であり、かつ現実－理想不一致は正の係数を示している。この類型に位置する者は、有能さを理想として意識し、実際にそうであると感じている傾向にあった。

自己愛高・注目優位 この類型は第2軸との正の係数を示していた。第2軸は、『努力する』、『人から好かれる』、『仲良くできる』、『格好のよい』、『自分に満足した』が正の係数を示しており、また現実－理想不一致は負の係数であった。他人との関係の良さを理想としている点で自己愛低・注目優位と共通していた。なおかつ、そのような理想の状態を実際に達成できていると感じている傾向にあった。

考 察

本研究の結果から、自己愛傾向の2成分モデルに基づく類型は、理想自己の内容や理想自己と現実自己とのずれの程度から、比較的鮮明に描けることが示された。主張優位の2つの群では、積極的な自分、自らの意見や考えを持っていること、また有能な自分を理想の状態として掲げ、自分自身をいかにアピールするのかに焦点が当てられている様子がうかがえた。他人と仲良くすること、人から好かれることなど、対人関係が良好である状態に関しては、むしろ理想として掲げられない傾向にあった。Gabbard (1989, 1994) は主張優位に対応する無関心型の特徴として、“送信者”ではあるが“受信者”ではない点を指摘しているが、この特徴は理想自己の内容からもうかがえよう。また、意識される理想の状態は同じものの、自己愛総合の高さによって、その理想との不一致の程度が異なっていた。自己愛低・主張優位では不一致が大きく、自己愛高・主張優位では、より小さい傾向にあった。

一方で、注目優位の2つの群では、他人と仲良くできることや他人に好かれることなどが理想として挙げられる点で共通点が見られた。これは、先述のように主張優位の2つの類型では記述されない傾向にあった、対人関係の良好な状態を示すものである。この理想自己の内容は、抑制的で内気、他の人々へ意識を向ける傾向の強い過敏型 (Gabbard, 1989, 1994) の特徴と対応している。この注目優位の2つの類型に関しても、意識される理想に共

通点はあるが、自己愛総合の高さによって、現実－理想不一致の程度が異なっていた。また、Table 2 では、現実－理想不一致は第1軸により高い係数を示している。第1軸には注目優位である2つの類型が正の係数を示していた。つまり弱いながらも、注目優位であることと現実－理想不一致の大きさととは関連があることがうかがえる。この点は、小塩・小平（2005）において、注目－主張の成分と現実－理想不一致との相関係数が $r = .16$ であったことにも示されている。これらの結果は、他人の目を気にし、時には他者の否定的な評価を予測したり受け取る注目優位の特徴が表れていると考えられよう。

以上、自己愛そのものの傾向の強さである自己愛総合の成分は、理想自己と現実自己との不一致をどの程度感じているかに関わりが深く、主張優位か注目優位かという自己愛のタイプを示す注目－主張の成分は、理想自己として意識しやすい内容・属性と関連があることが示された。

では、自己愛の類型と不一致や理想自己の内容が対応しているということは何を意味するのであろうか。第1に、主張優位、注目優位それぞれの自己愛の特徴である、自己中心的なふるまいや対人場面での過敏な反応は、かなりの程度、“意識的・意図的に”行われている可能性があるという点が指摘できる。また、ある個人の自己愛傾向が、本人が意識する理想や目標の内容に帰することが可能であるのなら、現代青年の自己愛傾向が、特定の文化が理想とする人間像の影響を受けているとも考えられる。特に主張優位の自己中心的な様相は、近年の日本文化の「自己主張」に対する価値付けと関わりが深いのかかもしれない。第2に、この対応関係から、自己愛の高い個人の自己評価過程はある程度妥当なものであると推測される。本研究の結果では、理想自己の内容や現実自己との不一致の様子によって、それぞれの自己愛の類型の様相をある程度描くことができるようであった。つまり、自己愛の類型と理想自己との対応関係には、ある程度の必然性が認められたと考えることができる。理想自己の内容や不一致が、理想として特定の状態を意識し、それと実際の自分自身のイメージを比較するという自己評価の過程を反映しているものであることを考えると、自己愛総合の高いどちらの類型も、目標を意識し、それに対して満たせているという感覚を持っているようである。ゆえに、自己愛の高さは、一連の自己評価の過程を経て得られている、もしくは維持されている感覚であると考えられる。もちろん、その評価結果に歪みがあるのかどうかは判断できないものの、そこには自己愛傾向の低い群と同様の評価プロセスを見て取ることができるようであった。

今後は、様々な観点から2成分モデルによる自己愛の類型の特徴を整理していくことが求められよう。特に自己愛総合の高い2つの類型の差異を明確化していくことに焦点を当ててゆく必要があると考えられる。

引用文献

- Emmons, R. A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.
- Freud, S. 1914 On narcissism : An introduction. (フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次 (訳) 1969 ナルシシズム入門 フロイト著作集 5 性欲論・症例研究 人文書院 pp. 109-132.)
- Gabbard, G. O. 1989 Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.
- Gabbard, G. O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM-IV, edition*. Washington : American Psychiatric Press.
- カーンバーク, P. F. 2003 正常な自己愛と病的自己愛の発達の側面 ロニングスタム, E. F. (編) 佐野信也 (監訳) 自己愛の障害—診断的, 臨床的, 経験的意義— 金剛出版 pp. 102-116. (Ronningstam, E. F. 1998 *Disorders of Narcissism : Diagnostic, Clinical, and Empirical Implications*. Washington, D. C. : American Psychiatric Press.)
- 小平英志 2002 女子大学生における自己不一致と優越感・有能感, 自己嫌悪感との関連—理想自己と義務自己の相対的重要性の観点から— 実験社会心理学研究, **41**, 165-174.
- 小塩真司 1998 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **45**, 45-53.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, **50**, 261-270.
- 小塩真司・小平英志 2005 自己愛傾向と理想自己—理想自己の記述に注目して— 人文学部研究論集 (中部大学), **13**, 37-54.
- 小塩真司 2004 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Raskin, R., & Terry, H. 1988 A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- Rosenfeld, H. 1987 *Impasse and interpretation : Therapeutic and anti-therapeutic factors in the psychoanalytic treatment of psychotic, borderline, and neurotic patients*. London : Tavistock Publications.

(2005 年 10 月 30 日 受理)